



文庫  
50

寛政年中  
柗宮御會御連歌



寛政二年正月十日 柳宮御會

同 三年正月十日 同

同 四年正月十日 同

同 五年正月十日 同

同 七年正月十日 同

同 八年正月十日 同

同 九年正月十日 同

同 十年正月十日 同

同 十一年正月十日 同



同 十二年正月十日同  
同 十三年正月十日同

實 空 實 放



寛政三年正月十日

伊地知氏書冊

柗宮御會



何木

常任の世に春をまじへ松の色も暈  
心せらるる世のともろく由敷  
首舟のまじりまじりの霞然て赤川  
物もく流の香る都も其阿  
初草や世のくまら切人清時  
水もくく明ら山本思水  
たもくく河の流るる為信



小舟の棹は雲拂ふ地通経

夕風舟の影は道ゆく信傳

海しき川は流るる七良瀬上

福直寺軒の簾を捲揚る信賢

見し車のまはるや日暮

志まふ男もさるる花も春霧

斗まふ女もさるる花も春霧

傳はくも祢は清涼なるじり

嶺の後の月もさるる川

見し花のまはる昔も秋更る水

霧のよも片削きく顯きく経

らるる心もさるる玉值信

蓮咲庭の池水底清く蓮

法の心の真はいよるる流

水もさるる山も波もさるる徒

徒あはるる心もさるる道賢

孝陰帯の影はさるる兼逸

只及初の旅入年枕何

あるを人果あまのまはるる川



夜はまじくおの明本のくそ 永  
山風は味く梢のひり馬 時  
枚生の奥や松時雨らん 鍾  
川水の音もさびしき寺の前信  
宇治の渡へ暮てしりき連  
帰るきの道は木橋の里ひて 流  
露よ衣を打ちまはるもほく 逸  
守更は月を寂しき晩稻田り 賢  
こききとくさる鴨の羽りき 川  
天り舟ぬをたけの浪まれ 永

我物思ひ何よまをるる 徳  
年物を夜は紅葉の繁く 逸  
りよの目たしむ入おの滝 時  
嶺の山路や雲の埋ひしん 鍾  
河津ややくりを柴舟 流  
こきき深州人らおのり岸 連  
見えんかたもさびしき 信  
そよぶる思ふよしのあはれ 川  
おのりあはるる 行末 逸  
衣は只被さるる 舟きの露 徳



キラ〜〜〜〜〜小男麻の声 永

萬歳の風冷〜〜〜照月〜〜〜河

残る房乃〜〜〜の〜〜〜貫

冬され氷も動ぬ小田の原 逸

夏も〜〜〜雪の夕〜〜〜のま 徳

二之形車を庵有〜〜〜永

心〜〜〜ある〜〜〜川

橋も渡ら〜〜〜の嶺ある 時

霞を湧く玉多るの声 阿

春深き雲井の庭の静〜〜〜信

月をこ〜〜〜の雨晴る跡 連

ことひ〜〜〜遠座を急〜〜〜賢

あ〜〜〜身と〜〜〜の秋 經

わ〜〜〜も〜〜〜思神 川

あふの山のも〜〜〜有〜〜〜ん 逸

待心等保あ〜〜〜ぬ 郭 云 徒

誰〜〜〜らん老の徒然 時

明暮も只古の思〜〜〜く 阿

絶きまの道を〜〜〜し 信

正直ある根をお〜〜〜て 作 世 流



畔をちりり作る千畝賢  
ほくし隈を竹の一重垣逸  
分川寛やちか谷水川  
月影をささげはやくん経  
暮てや入風のぬ儀永  
焚焼烟を霧のまよらん時  
花は仄くはやく去来徒  
紫のふくも藤や白くん連  
袖うららるる婦人逸  
あしきの麻のつまはれひ川

心くくくあまを思へく河  
蚕乳根はほろ道を高きや  
續継哥の傳へえくも流  
佐保姫の流の末の泡やうて永  
いく夜あまの涙のうん時  
十七月の輝をうらるる法船逸  
露のるかゝ頼む遊女経  
浅らひすしあまけつう賢  
ゆらぎを揺るがす今日の候通  
兼てとろ綿掛し家振胤



かよきまの根を拵  
さよふあまのしや  
暮て誰の帰る真砂地  
をられつ外衛退まの神  
残る細き燈の  
家の上久か官断時  
又新もも掛る住き  
つよを實の人か  
この産屋の日  
梓弓を末とく  
往

くわし葉の端を  
掃残も吹来  
痛ましくありぬ  
賢

昌次十三其阿九  
内長殿  
信賢八  
良胤八  
昌徳十  
信連七  
寿輔一

寛政三年正月十日

柗宮御會

山何



住鶴や文を好む松の春昌逸

長閑な亀の遊池水内春殿

動無岩根もあき日のごとく去川

田面残らぬ鋤るべ頃 昌成

里も雪のひまほ道彦も清時

かたみづりに續く村井 昌永

山幸や月涼しく明ぬん 爲信

行雲洩れ遠る河ら 通経

水上の晴雨木の葉流せり 良胤

荒るる鳥の声をきく 暮 信連

恒中よ人只夜初の冬挿へ其阿

賤も心や樂しき人 昌徳

仕波の君のあたらふく 春輔

探ひかきし 哥の品 逸

睦しき契ち星を羨く 成

片破月入るる 恋我の川

よもあき秋の形路のちけは 永

ハのちく事をよひ 我の道 時

あもらん花の心もよき 経

去斗のらん人 時めく 信



たも今朔霞の色の薄衣連  
雲ハ裾巾ヨ消々すしし 亂  
初雪の降る程なく風折て徒  
まへへ一平ノ帰る鷹飼阿  
行山や嵐を浪もきあへん 逸  
もや力はある。鈴鹿路の末成  
伊智の海がく暮月よえ 沢川  
松の葉こゝ此紅葉一本経  
里遠た野中入庵のまや誰信  
くく一有ちも團ふ茶垣 永

ゆくもは生史転じ姿小て 時  
揚かんのらん 長き黒髪 連  
逢ふ事の絶て程妙襟ひ 胤  
柄とてぬくまふ袖の雨 逸  
かゝく入て敷くや守の宮の中 何  
松も昔を思ふささめや 川  
内宿見も草の扉の月をえ 永  
床の若細く夜花更ぬき 徳  
秋風時あを送る帯へく 逸  
葉にくれくれとよみ 滴み 信



おひらきまきの川はあまの道  
曇のひらりひらり暮時  
夏時の茂この露も乱らん成  
誰か通ふ古里の道流  
傳ふと妹よを聞まはし川  
心よつる者のこき橋邊  
花散る後の形見の雲のを徳  
霞して鐘の声あふ草一逸  
地こねくえよ雲雀の聲を  
水静ぬる水人の遠方河

深谷とはあまの明離時  
白き二竹の葉邊の霧川  
庭清きよみおのる色は逸  
都秋てし神の鏡や徳  
仰よるこの玉垣露もは信  
赤祓回しよのけし妹も成  
雜面も終よ心のお解く河  
久し御の行我あはれ道  
分ぬる八雲まよひ山橋永  
朝より衣ま出る道邊



美の人の露に拂ふ春の風 川  
波のよみせりも代土 経  
村のよき声遠くも 徳  
浅茅、糸の冬拵一庵 成  
とこまの合自絶る一庵 成  
物てい草の芽をも思ふ 川  
今い冬もかもしぬ 逸  
又も秋の始ちるん 徒  
いつより待たぬは 胤  
まゝいゝ若き人の瓜琴 永

月之夜を離の敷の赤い道  
跡分の跡のながし 信  
草むしの露をたむ 魚の声 經  
端居新は涼を 逸  
任ふをい水近くも 時  
思ふはあまも 山 河  
甘の外の吉地の花のうね 川  
初瀬の里の生を 胤  
みあふぬまのきの 信  
風をむらゝ霞は明反 成



法私出行冬乃江の南 徳  
海東遠くくくく時山 道  
皆そくくをくくあふの松 永  
かろく流くくくくく道 川  
くくくくくくくくくくく 池  
くくくくくくくくくくく 河  
かろく流くくくくくくく 経  
くくくくくくくくくくく 成  
くくくくくくくくくくく 池  
くくくくくくくくくくく 河

暮くく帰く山流の打度 胤  
尾上寂くく雨のぬる事 徳  
池のきくくくくくくくく 時  
旅乃抱のくくくくくく 河  
くくくくくくくくくくく 川  
歌も酒の酔かきくくく 成  
嶺ゆくくくくくくくく 徳  
舞出はくくくくくくく 永  
唐路もくくく園の初花 必  
猶舞くくくくくく 州 道



昌逸十一 昌景九 昌信七 信連八 春輔一

内倉殿五 清時九 通經七 其阿六 吉川十二

良胤八 昌永九 昌徳十

寛政四年正月十日 柳宮御會

何人

言の葉の種や心は松の春昌逸

長閑は佳代々の國民内倉殿

天地も同一霞のちをばごとく春

あふをば今よ山端の月昌景

秋水の帰るやまをば海ゆらん 昌永

並露ふり道入の業 信連

障もあも晴行く星の遠方よ為信

あはれ鳥の声静かなり 通經

朝早くに汐の入りいそいで 良胤

今ハ船出を急ぐ旅人 清時

山麓 昨日は風やよきらん 其阿

年々四方よ花や待てる 昌徳

梅柳まはるは春の色んぞ 春輔

明きハ佐保の柳霞ごとく 逸



ひた乃名深知りて半天より成  
赤玉草いづくはくせん川  
名も白も思ふもたれも眠らむ道  
よもいづれぬき中のむらさき永  
臨む井の水の心や深きん経  
曉月より光るお社信  
とわくの露霜繁き小田守時  
おとた陰よむさき屋胤  
山月も庵のき通ふ窓の前徳  
砌のたぐり入り又寂し一は阿

清き雪より白細く水もそそ  
舟引細やうは水もくん成  
夜をくして細き浦上の声よ川  
常々静りき大宮の内道  
写繪の橋よ六次風も形し永  
挿し扇の霞じ日のしけ経  
暮るも公尾の鷹をそゆ野は信  
舎りすれ里をたぐやく時  
うらまきひくはる妹、袖もん胤  
つと初てまのくたはれ料逸



はるのこころをせめて月とまき河  
ね我らついでと鐘もあはれん川  
いねその山風の枕とあてて成  
ふに又母の乳房もあはれり徳  
志まの君昔を今の墨衣逸  
聞をく法の道なきとて永  
くは奇事れ轍あはれりとて道  
とて一行事を思ひあはれり信  
休もあはれりとて十寸鏡経  
誰うたをともあはれり思髪胤

一 才いとの物じつこの新挽時  
あまのたれぬじつこの浮霧成  
古のをたれぬ空の月徳  
海に深山のをたれぬ暮也  
春もあはれりついで花の雲川  
まげの途へ帰る鳥り糸阿  
朝朗霞走や終るらん水  
嵐のこころ前の棚橋道  
強しり人を後世にだてて逸  
あはれり大のこころはじ経



うらやまのこゝろをわづらひて流  
るまは乱るゝ糸をさし巻川  
へ負きも安く住む草草の信  
づも今日の昔南東の徳  
一聲も人傳多き郭の成  
月を待待し市の帰まを逸  
秋霧のひまを方ま望りく阿  
栞のしら散る遠の山本水  
井よももくぬ田面の夕暮る川  
行川水と音のせしむ時

誰駒の鈴麻路近く東の逸  
旅の衣の汗の明本の成  
憂事を厭ふ霜夜の若貴て徒  
おのこははる古きれ一末阿  
残れも紙魚は朽せん葉の跡永  
積まざる塵をほり家の風信  
軒道も生る兵竹葉も流て道  
ひて花もたの茶もく地川  
所より清き雲井の月の夜<sup>暮</sup>経  
真砂や露の玉をくくらん逸



よきゆくは冷きも流るる時  
枕更行くまのよゆ 徳  
是れらの花心のわくれ成  
霞の敷きふもつ山 流  
祭りの二月をた鑑向坂 川  
刷一都の風俗とある時  
人紅雪子教とある徳  
立交る世に麻の蓬生 永  
夕負のまゝにして候行慎 逸  
月の仄めく巻の麻もき 道

まをよと誰くちぬ衣信  
や一肌をきく頃か秋 纏  
おぬまは様の紅葉極は 時  
時雨よまゝふむあのもら 川  
峯遠く星迷ぬる黄昏よ 向  
過るはいつと鶴乃聲一 逸  
舟り守宇治の河をためて 流  
真茶よりほろ里の一む 徳  
夕日新衣や汗は濡きん 永  
道のつらふも休む歩人 向



身を訪へん國の丘まきのあき川  
明行雲の足ららの山道  
霞まの雪の光のやうして徳  
久くくや風の構入りと成  
天津日よ小里の花あふん逸  
首くく小声の豊あきと時

昌逸七 昌成九為信七清時九  
内大臣殿より奉輔、昌永九通経七  
其阿ハ、玄川十一信連ハ、良徳七  
昌徳十一

寛政五年正月十一日 柳宮御會

山何

小早稲花の松よ小志よ清時七  
若枝栄あ梅乃茶中内大臣殿  
号よ親よ址殿豊くく玄川  
釣竿捲揚る神も陽あ其高  
明初る外山の嶺や霞あん昌永  
托よとくく旅の休らひ信連  
顧る都ら月のとめる夜よ通経  
志くくくくくくくく信



は花のむせ色に馴れ合ひて良風  
 小田の宿舟を別れ残す人 昌成  
 里にてもや久保の山を九清時  
 たく家<sup>ニ</sup>ふかき道の一節<sup>ニ</sup>轟  
 見れば道は秋の月分てら  
 夕の夜も更へ中の遠書<sup>ニ</sup>返  
 聞かすし是の秋の舞の音<sup>ニ</sup>送  
 積の嶺とさうりつり川  
 舟の葉もさうらひをまて信  
 花かへ借し<sup>ニ</sup>去の里人 永

花の舟の雲の風<sup>ニ</sup>送<sup>ニ</sup> 時  
 新もさうりつり<sup>ニ</sup>野分<sup>ニ</sup>の遠<sup>ニ</sup>送<sup>ニ</sup> 経  
 駒放つ小舟の月の音<sup>ニ</sup>送<sup>ニ</sup> 送  
 招くるや<sup>ニ</sup>淮河<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup> 汎  
 夕の舟に見まは<sup>ニ</sup>移す<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>花<sup>ニ</sup> 川  
 雨の<sup>ニ</sup>結<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>お<sup>ニ</sup>板<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>候<sup>ニ</sup> 成  
 や<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>浪<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>旅<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>郭<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup> 永  
 独<sup>ニ</sup>活<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>こ<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>草<sup>ニ</sup>花<sup>ニ</sup> 何  
 明<sup>ニ</sup>ぬ<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>な<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>着<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup> 経  
 別<sup>ニ</sup>れ<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>へ<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>へ<sup>ニ</sup> 心



河沿の春のまはりかたのき流  
空の後のまはりかたのき  
紅葉の下の思道路おし成  
まの六月の暮る一集川  
あゝあゝのまのまのまのまの  
親しむ人のまのまのまの信  
陽のまのまのまのまの河  
秋のまのまのまのまの時  
白雨の露や竹葉に残るん道  
けしきよの羽の群鳥の声 永

あゝあゝのまのまのまのまの川  
あゝあゝのまのまのまのまの成  
あゝあゝのまのまのまのまの信  
あゝあゝのまのまのまのまの道  
瑞垣のまのまのまのまの時  
あゝあゝのまのまのまのまの胤  
あゝあゝのまのまのまのまの成  
あゝあゝのまのまのまのまの河  
あゝあゝのまのまのまのまの成  
あゝあゝのまのまのまのまの川



入て我身は悔む花の夜  
馴るる谷の庵やそ涼き経  
事なきも母の春は去る河  
永くをさくくは市人時  
榮車に返るるなあひん川  
つれな半のほも持心取  
香も口ひやうは物書方胤  
列し扇の主は志まはく遊  
神の高の残るもなきは  
十日の葉のほむしはあは信

ふたふた二度愛む月の色時  
昔の秋乃伴ひは那成  
何ぞかく衣冠を夕暮し永  
又吹書も同し松の夜道  
雲を待空頼めは村時雨逸  
りしうらぬ嶺のすは後川  
松木蕉人朝をさくらん成  
卧所去行くささの声胤  
爪琴の調妙も弾出て信  
よ我のくさのさくらあは逸



行舟のふらり雅面より方遠の道  
返り煙草のふらり文使の経  
おもしろきも花も時分守る川  
壺蓋の嘆道乃遠の道河  
雅子鳴声霞のふらり山  
行水舟のふらりも水永  
棚木のふらり雨の時ぬん  
月仄の残り屋乃前成  
衣打音のふらり風かき  
暴風の後入るる風の時

唐描の八張の敷のふらり道  
志のふらり人のまを川  
浮雲の流のふらり信  
ふらり春雨の時  
流のふらり露のふらり経  
さくらやいづの依俣の袖  
鷹飼の野のふらり成  
ひらひら大原乃里道  
於人世思のふらり川  
子のりまをば表まむ時



そのまゝに傳す佛のわづらひを河  
あまのりく堅守法乃月新 永  
國風俗は秋久堅入日本日逸  
露や御鉢乃雲あまのん胤  
妹と背を導、今の傳はく時  
吉州のあまのぬ恵も社なれ川  
別ては面影、ま今朝の雲道  
名を遠く古里乃空信  
一ふの吉を坐る花盛 成  
波呀之は法のまのれ穢逸

消への雲やまのり永  
鋤くぬき田面はく町河

昌逸<sup>十四</sup> 其阿<sup>九</sup> 通經<sup>八</sup> 良胤<sup>八</sup>  
内倉殿<sup>一</sup> 昌永<sup>十</sup> 為信<sup>八</sup> 昌成<sup>十</sup>  
玄川<sup>十二</sup> 信連<sup>九</sup> 清時<sup>十</sup> 寿輔<sup>一</sup>

寛政七年正月十日 柗宮御會

何路

山よりく小聲や萬代松乃春 昌逸  
末の豊年代祝ふ養生 内倉殿  
西風も長周のふり時を傳はく景



雲井乃月の影圓あり 其向  
飛下や空の外はつらん 昌永  
船らくりし秋の海顔 信蓮  
夕竹の音残るる若原、通經  
寄方いつら水乃るき 永輔  
昨日見し曇風は清めて 為信  
明の朝乃空を涼し 龍良流  
村雨の雲や行をけりん 清時  
走りやう、弾琴の音は誰 昌寅  
身は独心細くもなき 玄川

月がのひとをくすむじん 春輔  
露の身を捨てて 山流 阿  
秋の白まぬ梅もさあは 逸  
詠りてつら寂し 雲の雲 道  
花々霞くく人々あも 成  
将湯を離れや遠く 春人 輝  
いつと雪乃るはなむ 妙の末 永  
草花春の夜深く 起出て 胤  
おのへらあやむ 古里の夏 鍾  
別ての後乃鉄のいろ 舟人 寅



頼りし今昔もよめる時

心ゆくもわが世をさぐる也

讀みし書もよめるもよめる信

任吉の松乃草を仰ぎて成

牛山樂とるをの愚を川

樂もよ又頼びる地をよ経

月もよ今此名もよあや教也

故をよ桂乃もよ時晴て時

風乃行方の一長川霧河

遠きもよ声もよ友子鳥川

道もよ今もよ漢弟生のもよ道

咳もよ古今もよ松乃鐘の声

春の昔もよ今もよ世の中一輔

たりもよ今もよ保の十寸凌也

はへもよ今もよ神乃廣前淵

とるもよ今もよ雲の林乃鐘の声

もよ東の海一星残る空に寅

霧もよ今もよ屋上の月もよ傾く道

葉のまもよ今もよ風もよ音川

朝もよ今もよ鳥や壱もよ阿



出るをいせく旅の中を成  
くくはも只夜初的情を捕  
たふまきあふくかよひに  
かしまた人か遠みまよひは  
鞠のまはのおまらる暮時  
花まみ雨ら春の浪を運川  
庭を寂しく霞む灯永  
所人の波の夜舟は梶枕成  
風はくまふ陣の羽はく煙  
取出んかより冬の衣お遣

秋の形見の木葉たぐを川  
ま露の厚き山賊帰舟て時  
まらへの国は月あま暮寅  
いつくは梅葉の音の聞ゆん  
限まらまきかふる武は世阿  
拂へままらいつく思草川  
まら待夜の麻葉の塵を逸  
董まら風戸はまら指やる寅  
追付は離れ衣の音るひ信  
傍の人ま踏き新糸永



古ふらふらふあえいふ道  
圓空の碑とあはれ文と千世  
権前のころあふさう海成  
雲を枝花重なる菊の枝阿  
秋の蟬や羽衣くくん寅  
野分せし世の日新暮果て経  
誰う月傳霧のくく庵 経  
麻衣おき音絶ぬ雷くく道  
波のりくくもや納代守神補  
まのまの宇治の橋原傳ぬん成

朝霜かきむふ山眉 水  
木峯の雲引かきり秋と川  
落る流の瀧の糸水 逸  
岩枕おのほまの雪 寅  
まのまのまのまのまの時  
星をさくぬ霜の毛衣暖は 信  
光いさくふ時の静はさく 胤  
明るる川に月や残るん 水  
霧月をさくくくく富士の根 寅  
露叶を雪まのくくく旅の欠 逸



園を杖ぬれは伴ひも成  
積のあふ糸の濁り身成て捕  
心づきのあふりしきく逃  
憂中をいづく鳥の花梅時  
汝ら浮生も鳴り郭公経  
春もさや日敷志の雨禁河  
すかゝるさるるの内川  
遠の都を思ふ夜寐も成  
明らら又もかへん世糸道  
たを思ふを聞か玉霞寅

たみよのさや冬のあの人 信  
登衣をき日敷の千代く川  
あふれよともさるる梅時  
性くも終のいよちし系作泳  
竹葉ふち散山の片山岸成  
一本の花の風も生流て逃  
こまの豊の處し明仄胤

昌逸十二其阿七通経六良胤六  
内大臣殿万昌永八永輔六清時八  
昌成十信蓮七為信六昌寅十壽輔一







行川の形はも残る水信  
日と経るくらし葉積の跡経  
日の秋言くは家の渡りく時  
七指のしつ木の遠方 流  
書きよふ藤や屋を流る川  
朝をいそぐたの社土 寅  
佛の御衣本むむの世の  
作くお所の神の古く是  
増鏡曇世にやや守るは  
助りの底もくやや水河

桜散る風を柳も片もして永  
独病りくし春の夕鞠時  
床はのこもる處じ釣竿の 経  
待りたえなまよさくぬ雨の川  
赤いひさをそ戀じ月もあは  
秋さく暮ぬ妹捨乃と春 逃  
重なる肌をわし旅衣 淵  
智茂船もいよ浦を舟 信  
流さく寄る夜曲の松の陰 阿  
みる見涼く捨る登の子 成



又まの雲のほろむの玉暗て川  
靡く柳やたかくるらん経  
しほよめさくふやも胸内文  
こころのふかき愛は水  
まがれん半世のこころ時  
聞まよふとし説法の場合  
問ひももさのこころの難信  
たより形跡の又へ冷まし胤  
八つおの松舟がの思を成  
身をこころの年月の教也

道もの色もわいのま舞。意  
なれは舞の朝持の山川  
かみかみ昨日のふは是て道  
灰しちよる夜おのなや成  
兼言のよは空も独り経  
中の衣の痕のまよ時  
かみ聞あぬ貫行舞て送  
苔の雪やもほらん寅  
よ舞まよ同みよの松の川  
土風も聞の軒の静けさ河



九まてははまはらとて流  
更し草のこころをこし道  
膏のつらのははらぬ鶴何年永  
山陰家へ半後の川に歌  
紅き草散る水より時をこ成  
まぬれぬ又も虹を棚川に信  
村雲のまはらぬまふ谷に歌  
果んりん流をこし舞の年川  
見まはらぬまはらぬ人さ  
化しまらぬまはらぬ色流

郭公のまはらぬの心をまて  
あゝあゝあゝあゝあゝ黄昏永  
柿のまや雲のこぼるん  
茶こる時も冬をこら  
里とぬれ信と中への庵  
かゝるまはらぬの心を成  
夜まはらぬまはらぬ時  
雲のまはらぬまはらぬ  
花も柿の柿はらぬまはらぬ川  
まらぬまはらぬ人の心を成



世業もいかに世の成りて  
又今も世を以て琴の弦河  
酌酒の酔心やれりん  
世の交りいかに世の成り  
正直なる文を学の意の成  
引師とやいかに世の成り  
道廣くも世の成り  
枯れく世の成り  
降雪や松を埋を埋せん  
相もいかに世の成り

去つ世の成り  
掛衣もいかに世の成り  
月よる世の成り  
舟いかに世の成り  
敬もいかに世の成り  
田面をいかに世の成り  
残る世の成り  
世の成り  
世の成り  
世の成り



ふ中野よりしひ花の朝霞也

うてふの竹ふきのの故年一時

昌逸十三其河ハ通経七借時ハ

内大臣殿一り昌永ハ為信七昌寧ハ十

昌成ハ十一信連ハ良胤七玄川ハ

寿輔一

寛政九年正月十日 柳宮御會

山何

松の葉や松ノ讀置ふけの去昌逸

真砂の鶴や長閑なる聲内大臣殿

水廣き御池の水今朝解く最

霞ふきのの氣色もあはれふ昌永

結ゆき垣根の竹やまむん信連

去りやふもむや雨そく里通経

更そこの月のほくく山陰ハ一夫實

玄洲ハいつこ遠き麻の若 為信

ふけハ檜原ノ木の枝をとも清時

暮そ雪踏む枝のり庵 昌寅

旅衣昨日ハ聞ぬ鐘鳴く玄川

近月くくぬ古里ハノ空 壽輔



あまたの侍道子房の中 永  
侍とての夜半は轉寐 逸  
心之れう、緒琴弾き捨て 経  
有―世志さふ女の穴― 成  
刈絲の声也、落る天庫一 信  
帰る田面の月、あゝ暮 道  
任方の林をさへまゝ露晴て 寅  
残る遠の出嶺乃浮雲、時  
三茅野や、<sup>菰</sup>の末に花も 逸  
春過くこゝ庵寂―き 實

かて時中雨のうすの部と 成  
あまた昔のさうさへん 川  
えまゝ河邊に二度とみ 龍 道  
解ぬ心もぬもいつも 永  
滋糸の志らね思ひの寝て 時  
作る栖もさうかきくゝ 逸  
風吹かま系乱きん草村の 實  
心何ぞしきる秋の枝の露 寅  
又やえん有明の月乃朝朗 川  
秋の繪鳩は離る筆の跡 成



磯の波あちちを霧の村の永

いづれはつゝ松の木の信

八隅迄君の御座や仰くらん

世渡り道いじりやあゝ

人集ふ市の高賣絶やて

酒有る川越やあゝ

冬とも抱たくや浦や

霜をいじり夜は守川

俵叫ぶ声も表は月落く

衣もぬす泪冷ま

うき中の早くも枝や

風のよも葛の根を

かゝるやあゝの里は

免くも公も細き谷

馴てさへ危く渡り

かまひや叫ぶま

梓弓洋生は花も

子日せし跡を思ふ

例は今日も春日の

さされておる使



心ふる人は文もかくきりぬ時  
品定むも同じ好夏  
合是きすの席は秋ありて  
洲濱の菊の折を以て色成  
るすあは月住吉の浦の秋永  
露の玉しく瑞乃廣前川  
朝清知袖の霞の折散て逸  
まよる陰いれぬ真神道  
柿宅て風竹嶺の暑日は成  
小笠着連ら道の榮人信

一村の里や都を遠く九川  
休是の跡也の暮を深むる時  
伏水の音も遠く聞え生て  
それあはぬ鳴の羽地也  
芳絶て月の残の暁く信  
身も心えつる丸窓おきき川  
必といひぬあはれ安く道  
静あき何花くらり寅  
かゝる心も相輝や時  
色の内霞いすれふ実



夕陽の風かゝる鳩うれ川  
浮葉搔かけおろす釣針永  
こゝろは柳の糸垂て逸  
あつちの鞠のころ黄昏寅  
為物のぬく小雨の只志に成  
雲井の啼こし女怪しき信  
いとしもあも豊の明や終らん実  
燈細き此乃すまはけ川  
夜深くみおの極白ひそく  
今も外山の月朧を判 時

音を立ててやも我を惜む成  
泪をひひく別路の神経  
衣もまよふ形身の衣恨侘 信  
古き鏡乃塵ハ拂ハく 実  
柝枯し筒井の水もれお川  
冬の楸乃色寒き山 逸  
雲かゝる行場やなす時申らん 経  
埒まももつち小多流うふ成  
あまももつちかかん草枕寅  
隈ももつちかかん花明 道



事今ん水と我代隅田川時  
棹さし岸と岸の舟人永  
認て入ん花盛の柳蔭成  
紅深き梅乃一平寅  
霞はくたのふたの園の也よ道  
雪の雫やゆふはみらん川  
雁もさふ声もきこる手返り迄  
助るていりく様ひ豊多々実

昌逸<sup>十三</sup> 昌永<sup>九</sup> 実<sup>八</sup> 志川<sup>十三</sup>  
突<sup>九</sup> 臣<sup>九</sup> 殿<sup>九</sup> 信<sup>九</sup> 運<sup>九</sup> 九<sup>九</sup> 為<sup>九</sup> 信<sup>九</sup> 九<sup>九</sup> 暗<sup>九</sup> 時<sup>九</sup> 九<sup>九</sup>  
昌成<sup>十一</sup> 通<sup>九</sup> 経<sup>九</sup> 八<sup>九</sup> 昌<sup>九</sup> 富<sup>九</sup> 十一<sup>九</sup> 寿<sup>九</sup> 輔<sup>九</sup> 一<sup>九</sup>

寛政十年正月十日 栞宮御會

唐句

松高し惠のふを御代の春邊  
捉長閑に住る國民 内倉殿  
家くよ少の豊年を祝言し昌寅  
門甲も今朝の雪るを我を之其向  
山氷のまや霞を深むらん昌永  
柴人いつと舟呼ぶ声 信運  
暮る夜の月まは輝き川西の通経  
露をまぬぬ竹のたぐ清時



風も今秋より先よあつらん晨  
行雲涼一曉乃一空声  
結ふも夏叶松敷俺て轟  
旅寤や着き衣の下紐逸  
かきし世の契のま乃るれ業阿  
信もちる成一喜の業寅  
遠くく世暮れよひやと連  
頼も今いあこの古土永  
東路てかぬ小舟の櫂標時  
羅波の秋をともやも更行経

軒端涼は月も傾く世あな川  
雨の帯や松の残もな成  
朝霞尾上乃花も晴初て逸  
枳をとりまき遊子系遊河  
お眠る蟬も日影やねむん寅  
閑よりぬ園乃夕風道  
呉竹の上葉雪の重けぬ永  
引手やるまき山岸の舟人川  
四の流の音も月澄江の水も成  
夜更の渡り一三逸



守備る小田の庵も日の光  
経 横我くくたに細き杖火時  
飽期おくはくききのま 阿  
ふと斯迄も人の難面寅  
思ふもとよぶる後の親川  
とうねき跡もあは有る白成  
菫や枯て好のこ残らん逸  
垣根も霜乃花咲く吟水  
山里れ小春も志は去り似て道  
鳥の声きく妙の遠逝方阿

分別ぬ道の行方の真事か寅  
誰かへくくある志州 逸  
大義母のこりぬをい洋流ん 成  
音も鳴麻も泪もあふる川  
山住の秋の表乃浅くして時  
月のをちくく何をを飛くあ道  
おんがう七いつく入湊舟 永  
花をい残せ志候の浦風 寅  
ちも物も明日も掃除も藤葛 逸  
行も去れば花もくすまれ 成



昔ハ初ハ志メ一葉をうて阿  
うと抱いゝ山郭一経  
まう一葉を夜敷多の雨音川  
せめてハ身ハ逢ぬ程もん迄  
溪川身も沈むべき思ひて成  
衣よとすも沙の浮草永  
散る暮の曇ハ霧き柳陰寅  
三日の月待道の休ひ時  
昔ハ猶残る瓜や重くん経  
いま短くもたると笛の音阿

心さ入礼ハ斗解さく道  
うつゝいさる夢ハうつゝ川  
憂中ハ始ハ果も志ぬ世も迄  
命の程と契ハ我れたけ寅  
かとり分を志も志かな永  
いつ又早ん霞む山陰成  
名残あれや春暮方の流将川  
聞ゆる清の仄るる声 経  
閑けハ剛く齊院の宮祈時  
小雨の後ハ庭の夕鞠 迄



花散一本の草も夢見し成  
しや若楓色も我ちれ水  
宇津の山我らにも初時  
露の国辺の道の朝月道  
新細き月をよみ此中の声  
成  
壁もももまそくらき灯成  
団の心もまひ入夜や更ぬ  
寅  
恨俺もつらつらすす川  
人分はてあまの道も玉章の経  
交る市もえする 暮 時

群鳥連て壻も帰るら 道  
空も定めぬ旅をとのりき 阿  
月の雲晴まは又も時雨もそ 水  
いもはら山嵐こころ 逸  
一本はれもまよぬ嶺の雲 去 時  
住い幾代代の仙人の洞 寅  
影浮ふ亀もみかんは岩根水 川  
白鶴遊ふ池乃中鳥 經  
朝日さく光も清き欄干も 成  
ゆてや白く御堂の葉玉 時



るしれを思ひし出る葵草逸  
櫛けつりつる妹、仲人 永  
取袖は今の泪のふる鏡 寅  
帰らん心り 須磨の浦浪川  
遠きお船明石の道は阿  
ふるも友の後まてや 鳴 逸  
雲河の空や夕を急ぐらん 時  
往來も絶し 遠の山平 寅  
作もさる鳥居の内、神は七経  
小架の地を透るもを成

咲い書を遠き隣の花風 川

ま枝は梅のやえしらる 薄

昌逸 孟 其河 十 通經 九 玄川 十二

内大臣殿 一 昌永 十 清時 十 奉輔 一

昌寅 十二 信連 九 昌成 十二

寛政十一年正月十日 柳宮御會

山何

松の影を染むるも、風の音も遠

聲も長保し、鶴啼く庭内春殿

池水に亀の尾長き口より、昌



望し早根の霞晴り利 其向  
風渡の雲の霞や解ぬらん 昌永  
くらく麻く雨入りむ 信通  
旅抱更て月待山陰し 通經  
思ひやらく古里乃秋 清時  
ふのふを今朝珍しく 園初て昌成  
釣舟もくや 山ふ浦はく 玄川  
吹きくも跡無なる 新井屋 春輔  
芒々の烟は残るくれ 逸  
問抱く人を 答ふは 阿

今もく市のみすく 寅  
玉札を舟人便に絶てく 道  
心の外は遠くも中 永  
夜もく化目を厭 育の頃 時  
野分の名残あはるる 経  
笹蟹の糸の乱れ 雲は川  
見きハ小枝の滋きあは 竹 成  
二本くも花も 福も下水 一 逸  
舟さく速く 春の川岸 阿  
遠方の山際霞む 朝明 寅



誰、水無原の里をよみん道  
郭を聞ききひの雨の日記一水  
まゝぬ々の鐘はいつゝ川  
あやしくは逢夜早く明果て成  
あふひるさきとちを新乳迄  
法真の山に積り物とひ阿  
雪よま川みく物のは並時  
夢の端よ北の風、凌ぎて経  
蕾も開く、宮のあな枝、寅  
玉虫の小瓶の影ぬむら川

春経て酌め、作、味酒成  
三輪の神奈、卯月の教行を迄  
春より社のいらん山口水  
枝折せし谷懐や深うん道  
うたせいと、寺有増の行何  
子の上は思ふ心の鬼は角は寅  
いつ嬉しきえ、定めん迄  
錦糸を今より、も先立初を永  
絶ぬ相を掬ひし炭焼川  
皇の都よ、近江小形、山成



花をみるあつたの色く  
道の入り柿の生花のあきて  
流るる水のほろほろと  
行の心とよめる時  
花の音のほろほろと松の戸成  
徒然と語るも同巻の友阿  
あつた昔のをうらみきる経  
昨日えり着いたうらみ花の川  
流るるあつた時の夜あつた時  
花衣ぬきうらみあつた時

若菜揺られ流るる山あつた  
村あつた山あつた山あつた  
向ふにやうとせいの月代河  
川あつた田中の道あつた  
あつたあつたあつたあつた  
現とあつたあつたあつた  
川あつたあつたあつたあつた  
引網の網のあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
胸のあつたあつたあつたあつた



又よ時角の賤、玉の暮宿  
取残を山麓徳も蝉らへ川  
日影うつろく片曇の末鍾  
散花のあれは嘆つく遍撫永  
かゝる後の存生終るう送  
七十の年をたゞて秋霞成  
よもあつたのねとあふく道  
かゝるよの母の毎月能く魚  
生るを放つ何れもくし時  
何れも一博をまねに秋はよ送

思ふく去とも扇子手はか 川  
別は行心はくくのみかえん 鍾  
車やつしと思ふ道は路 永  
かゝるしはく髪は髪をさ蓬生よ 河  
あゝん御の香の体はひ 成  
夏のおもすまはる園は片て 時  
賜方にはよとあじ賭う 送  
お申を声も玉殿まぬ日人 川  
よこよひさきき春の御神場 魚  
月よなる文かへる城願く 永



里の樹衣のまゝに於ては丹河  
来りて遠近のまゝに於ては  
都の元をまゝに於ては  
別れに於ては事の時に出成  
せめて衣をまゝに於ては  
岡の元をまゝに於ては古  
今も於ては残る石文水  
河橋をまゝに於ては  
書と翔よよる鶴川  
野にまゝに於ては阿

舟長まゝに於ては川  
花の枝にまゝに於ては  
たのまゝに於ては  
任音の浦まゝに於ては  
みまゝに於ては  
まゝに於ては  
ひまゝに於ては  
昌逸 十 具阿 十 通經 九 志川 十二  
内大臣殿 百 昌水 十 清時 十 寿輔 一  
昌實 十二 信通 九 昌永 十二



寛政十二年正月十日 栴宮御會

朝何

聞えあひし声やよの華を雲の霞に  
祝ふ若葉もにぬま言の雲内大臣殿  
主人の連ねる庭の雪清く日曇  
笑よ過ふ風静る川 其詞  
日影を軒端の竹の葉とらへ曇  
霧消る乃蜩啼よ飛しよ信也  
いつよよ是は流きぬ水は逢  
掉袖軽く入や川 舟通経

紫人の拂ふ耳方の雨晴く清時  
入りやゆくの疎く山を 嵐  
願ふ高根の花の上を霞 去川  
志くしははまれば去の今も 春楠  
惜むも花をよほ生るる花は阿  
今も持り圓居や 花 出  
心さ人跡をよくあらしむく 道  
新の花乃夜半此花 花 出  
そらしの雲を空の月も色 経  
代々の例をたのよを合 永



秋の色よきまの道邊の松身成  
一際や、真砂地の雲達  
靄ふ其叙の光明をふれ  
神く、玉垣の内時  
陰なきあまの片割は、實  
扱は人々住吉の里川  
振暖まの海邊は、水  
霞は、くく、山乃道河  
うららかな、物に登る塩滝、時  
難波の朝日、出く、新  
途

大寺の廻り、清く、  
保志鞠の場の伴、成  
見初、を新ま、い、あ、襟、ひ、川  
あ、く、ま、ま、あ、ま、の、伏、寅  
敷妙の枕の月、と、有、明、日、河  
と、杯、の、礎、の、音、は、絶、り、道  
る、を、折、江、の、浪、遠、く、秋、更、て、途  
火、氣、降、り、き、管、乃、屋、の、暮、経  
い、そ、う、は、深、の、小、百、合、の、後、き、ん、成  
先、開、く、は、花、子、の、花、永



夕立のさけ跡の露見えて道  
簑毛一層も露の衣を川  
朽残る冬田の僧都其後経  
有君又下を赤い柳より一  
杖たのし府もつゞき形見は寅  
旧を捨てて国乃月け成  
斗の星行心もよる長き夜永  
せめていふれあやもふ形河  
らぬき花は相輝とびく逸  
いつは朽ん山吹の朵 時

此雨の露かぬも岸根道 川  
船引とめてまゆ。くま達  
御被せし被涼く吹風成  
漬きも衣のあより活すす 逸  
おくと守宮のきく涙は時  
照る玉のまもゆ。き川  
初雪の砌を誰くむぬん 達  
寒き朝も用く山志 寅  
梅一本年の内。色んて河  
桜はいつり花はあま 経



かいつ物案を懐き摩き日よ川  
霞じ浦曲の月をまはる時  
添き船路の詠免瘠せと也  
夜厚き声と聞郭公永  
まろん流の渡り休ひし寅  
何れもあま豆貯り室境を道  
ちきとや遠き人の帰らん鍾  
物申まきも答ぬいりし逸  
恥ふいもいひなき心をもて時  
絹やなまき中の衣手成

池の面のはら曲の苔まらんとよ道  
かきし風のみ乱れ藤川  
臥拵有る荒田乃道は行きて永  
いよほらん国乃よ庵邊  
岬里の月も隈なき夜かよ道  
竹の葉の露をいしり時菊の寅  
出陣の霧の帯は音絶く川  
末は烟き水乃落合 鍾  
散る花を流る川柳成  
羽くらげも燕子飛よ阿



小田也を袖にぬきて雨の日に寅

離たく大花も里の一方時

旅の宿見來ふもゆるり連

名のまゝ共よやうり花。成

若くし昔を今もまじり経

取出く又見ふ十寸鏡迄

忘らふ身の衰をわらへ何

書きあへく人花時めく也

氏の呆守の橋の袖裏成

涙も清水の深き源川

川に花を影通すもくも毎も迄

聞よれとてや鳴輿の虫寅

か行けい舟更の夕暮をまぢり時

小秋の露そよよと風そよよ

香は化よとらふ法の蘭川

風や立田の園を物もん迄

群千鳥と空の山月啼きて迄

時雨の雲の定めをきき何

昨日近ききりし雪の朝朝永

いつくも行も爪木拾らん成



心も踏んかゝら花の塵を 寅  
山も静り霞む水頃 遠

昌逸<sup>上</sup> 其阿<sup>九</sup> 順遠<sup>八</sup> 清時<sup>九</sup>

内大臣殿<sup>一</sup> 昌永<sup>九</sup> 通經<sup>九</sup> 玄川<sup>上</sup>

昌寅<sup>上</sup> 信連<sup>九</sup> 昌成<sup>上</sup> 奉輔<sup>一</sup>

寛政十三年正月十日 柳宮御會

### 山何

松よ志國栄ふ御代の春昌逸  
耕そ民の多き里 史臣殿

雪乃花子陌廣くも明初く其阿

霞む其方又物嘶ふ声 晨

汀より岸の若葉はあんな 清時

向ふ入江の浪乃静も 通經

指さ舟も月を伴ふ又暮は 是深

露を帯つて跡の草入 信遠

雨降る替へ弄も溜るは 昌成

雲を巻むの嶺の杖村 綱春

鳴るは 行方と云ふ 時を 昌成

是そはいつら 是の 道路 玄川



おまじりのの逢坂峠の河津森  
むらあひ斗はらや玉川の氷也  
夜まはるく月影の霜水成  
ふらふらと建つ河津の河  
草垣の津井もふはる酒<sup>カニキ</sup>の経  
お田の庵の酒の河津時  
道よとわと斗りの山形道  
代らぬおまやまはるく人保  
花<sup>た</sup>の川上はまはるく七  
花保の河津の河津水

河津や逢坂の河津川  
えり晴くむく<sup>く</sup>の女  
朝鏡はる色髪の恥らひて  
道よとわと斗りの山形成  
おまじりのの逢坂峠の河  
夜まはるく月影の霜水成  
ふらふらと建つ河津の河  
草垣の津井もふはる酒<sup>カニキ</sup>の経  
お田の庵の酒の河津時  
道よとわと斗りの山形道  
代らぬおまやまはるく人保  
花<sup>た</sup>の川上はまはるく七  
花保の河津の河津水



松更樹や雲の流るゝ水  
藤はうゝふ花の中時 送  
春雪の流るる水の音深  
雪又流るる谷陰 經  
夕の日の廻る南の山はひ 岸  
をのゝね風いさゝか 鶺鴒 宿  
紅葉散る桂の掛杖更し 成  
ねのまゝのおひあがり 時  
行路より傳入日の流る夜は 夜  
はひ流るの笛木の声 水

又一人の梅は花の流るゝ 川  
形と情をくくりにてさかん 華  
言のしるす花の流る 前度 道  
汗を流るる花の流る 車 送  
暮秋の流るる花の流る 經  
花の流るる花の流る 河  
花の流るる花の流る 宮  
花の流るる花の流る 深  
道は花の流るる花の流る 送  
又草花を流るる花の流る 送



はねも打たれぬまゝ時  
朝もくらす雲の紫栴川  
閑居く独座と抱出し河  
待りてく日と夜と経  
玉葛子七転むもなき夜よ峯  
思ひは深し真葛子暮の露成  
いづれせん人の心の牡丹風深  
憂文くくよまの女雲逸  
帰らんも行むも遠き旅の氷  
暮草は又も命をさそふ寅

散居も梅はあゝらるる川  
霞てく世のまゝに残りし時  
入りの回も女雲を初めは道  
新居のなきさたむむある河  
弓矢の消るはつゆの松をん成  
昔のみらるるをさるる岸は川  
出陣も中涼も雨の日は寛  
行ひくららぬ一夏の山氷  
庵近き蜂の泣き声聞馴て経  
あゝ〜送ひ〜る旅の暮深



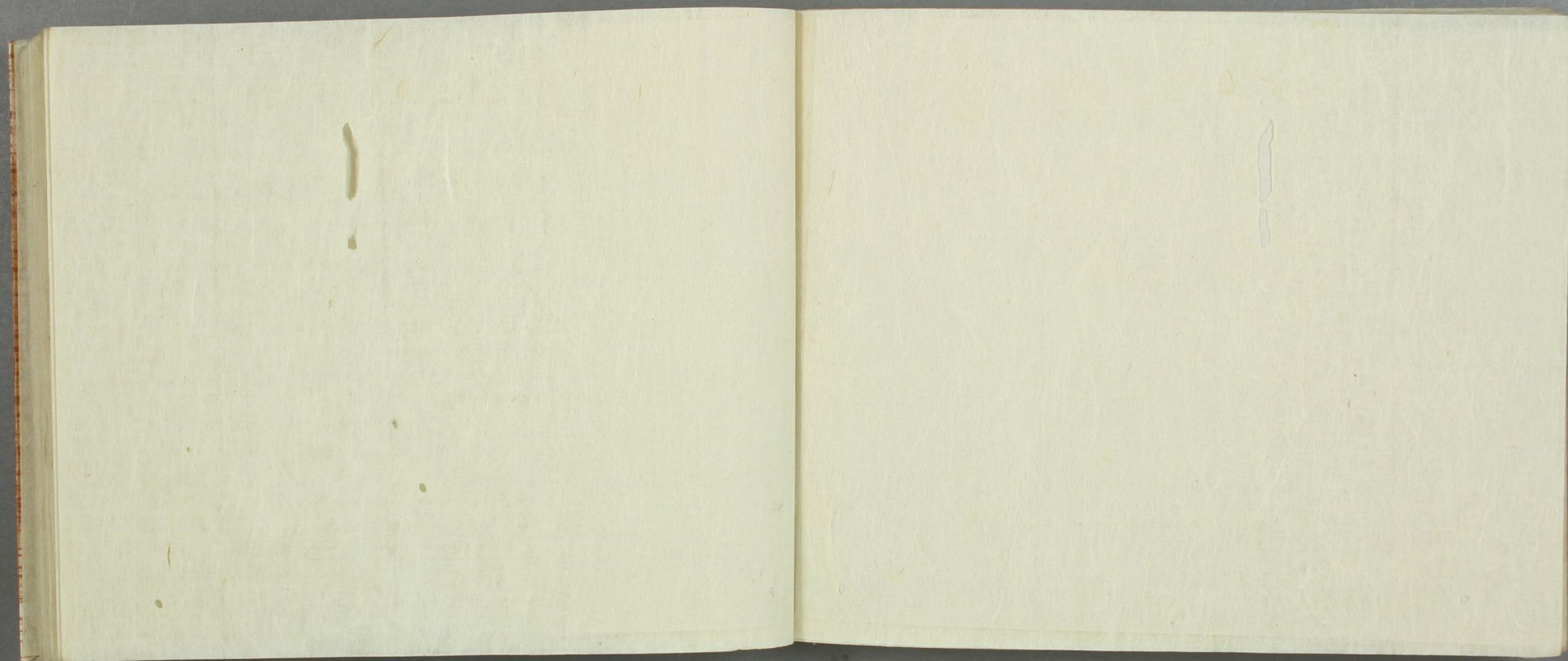
はるまの川<sup>別</sup>にせめても思ひ川  
をたふさしよ仲の舟成  
鴨鳥の上もや波のひさしん時  
水もたふさしよ舟守の舟成  
ちるもや押思も花をたふさ  
色にまじりぬ梅乃紅霞  
春の日は夕ふらぐ山降の成  
里の烟や猶あむんぬ  
竹の葉の露もさく草を  
雲中の宵乃橋あ川

好くは行くたの月逢に河  
何をさしよさしよの舟成  
思ふさしよさしよ今も昔も  
身はさしよ思ひ中も思ひ経  
明つら浦のさしよの舟成  
捨ひ捨すしよさしよ舟成  
さしよらるる玉も有りの舟成  
あつらひ思ひさしよ女神成  
燦々<sup>焚</sup>新明らるる雪晴く  
や更さしよ時申の声 峯



孝直より御書より贈る川  
思ひやうと宇治の山軍  
都より徒然侘わ月而して  
桂田真住斗帳よ送  
諷ふもほまの世の習ふく奉  
給ふ例一況ふ五承  
諸人の花陰衣春毎く成  
吉野を踏て遊ふ豊りよ河  
昌逸と昌成と見深七昌宣と  
内大臣殿より清時八信達八玄川十  
其阿ハ通短七細峯十寿浦一







以下  
12丁  
白紙



Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The characters are fluid and connected, typical of a personal or working manuscript.

Handwritten text, possibly a signature or a specific note, located below the main block of text on the right page.



